

第4回 都立高校の魅力向上等に係る懇談会 議事要旨

日 時：令和8年5月12日（火曜日）15時から17時まで

会 場：都庁第一本庁舎 42階 特別会議室 B

出席委員：9名（欠席4名）

【公開・非公開に関する注記】

本懇談会は、委員間の自由闊達な意見交換を確保するため、「2 議事（2）専門部会について」までを公開とし、その後の意見交換については非公開形式で実施した。

議事要旨については、委員からの主な意見・指摘を中心に整理し、公表する。

1 開会

- 事務局より開会の挨拶および会議運営説明
- 初回出席委員について紹介

2 議事

（1）「都政が抱える課題に対応できる人材の育成」について

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 国の基金を活用した取組については、制度の枠組みに沿うだけでなく、東京都としてどのような人材育成を目指すのかという観点を持って議論することが重要である。
- ・ 「人材育成」という言葉の捉え方について、公教育の役割との関係も含めて整理が必要であり、生徒自身の成長や自己実現の観点とのバランスを意識する必要がある。
- ・ 理数人材の育成については、理系志向の生徒の高度化のみならず、文系の生徒を含めた裾野の拡大が重要であり、生徒が「面白そうだ」と感じるような広く興味・関心を喚起する取組が求められる。
- ・ エネルギー問題等の社会的課題は、分野横断的な学びを促すテーマであり、理数分野への関心を高める入口として有効である。
- ・ モデル校における取組については、個別の成果にとどめるのではなく、他校への横展開や都立高校全体への普及を見据えることが必要である。

（2）「都立高校におけるDX」について

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ デジタル技術の強みは、多様な表現や個々の興味・関心に応じた取組を可能とする点にあり、それらを組み合わせながら「わくわく」するような価値創造につなげていくことが重

要である。

- ・ AI 等のテクノロジーの活用については、「使えるようにすること」自体を目的とするのではなく、生徒の思考や探究の幅を広げ、「できることを増やす」ための手段として位置付けることが重要である。
- ・ DX の推進に当たっては、得意・不得意を含めた生徒の多様な状況を踏まえる必要があり、デジタル活用が学習面や学校生活における格差につながらないよう配慮が求められる。
- ・ デジタル技術は表現手段の拡張にもつながると同時に、能力を代替えることで本来の学びそのものを失う可能性があるものでもあることから、生徒が主体的に学びや課題解決に取り組めるような活用の在り方を検討する必要がある。

(3) 「都立高校への入学に関わる仕組み」について

事務局からの説明の後、主として非公開の場において意見交換を実施した。

(公開の場においては制度の概要説明を行った。)

(4) 「グローバル化に対応できる人材づくり」について

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 国際金融教育を含む新たな商業教育については、経済や金融の基礎的な概念を体系的に学ぶことの意義や、高校段階で実施することの位置付けなど、社会に出てからでも習得可能な実務教育を、あえて高校段階から導入することの意義やメリットを整理する必要がある。
- ・ 行政が掲げる理想的な人材像と、現在の生徒が置かれている実態との距離が広がりすぎないように、慎重な検討が求められる
- ・ 教育内容の高度化が、生徒の生きづらさや教員の働きづらさを生んでいないか、教育の在り方を振り返る視点が必要である。
- ・ 高度な専門教育は、関心のある生徒が取り組める場として用意すべきだが、全ての生徒が通るべき標準（スタンダード）にすべきではない。

(5) 専門部会について

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 論点が多岐にわたることから、テーマごとに専門部会を設置し、より専門的かつ実務的な観点から議論を深めていくことが重要である。
- ・ 専門部会での議論が懇談会全体と分断されることのないよう、情報共有や参加の在り方について運営上の工夫が必要である。

3 その他

「都立高校への入学に関わる仕組み」について意見交換を行い、委員から次のとおり発言があった。

- ・ そもそも何のために入試を行うのか、学力で生徒を選別することがどのような機能を果たしているのかといった、選抜の本質的な意義を問い直す必要がある。
- ・ 生徒は偏差値だけではなく学校の特色を見て志望校を選択しており、子供たちができる限り希望に沿った進路選択ができることが重要である。
- ・ 転学制度も含め、「入りたくなる学校づくり」をダイナミックに考える必要がある。
- ・ チャレンジスクールのニーズが高い中で、定員拡大等も選択肢ではないか。
- ・ 入学者選抜は中学生にとって「次のステージへ進む区切り」としての役割があり、受検生の負担軽減という観点だけで入学者選抜を簡素化することは避けるべき。

4 事務連絡

○ 事務局より

本日いただいた意見も踏まえ、専門部会を稼働させ検討を進めていく。

○ 次回開催日程について

第5回は令和8年7月以降に開催予定

5 閉会